

**「確かな学力」を身に付けさせる社会科学習の在り方**  
ー学ぶ楽しさを実感できる授業への改善を通してー

小栗英樹 菊地明男 石川洋一

## 1 研究テーマ設定の趣旨

本校の共同研究では、平成14年度から3カ年計画で「確かな学力を身に付けさせる学習指導の在り方」をテーマとして研究を行っている。学力を「学ぼうとする力（意欲・態度）」「学ぶ力（問題解決の思考・判断，問題解決の技能・表現）」「学んだ力（知識・理解）」の三つの力からなるものととらえ，これまでの共同研究で研究テーマとされなかった「学ぼうとする力」，すなわち，学習意欲・態度なども含めた「学ぼうとする力」を育成することにより他の学力の向上を支え，ねらいを達成しようと考えた。その「学ぼうとする力」を育成するために「学ぶ楽しさ」に着目し，それを実感させるような授業改善の方策を探究してきた。

本校社会科では，他教科と共通する学ぶ楽しさについて研究を進めるとともに，社会科独自の「楽しさ」にも注目し，上記の研究テーマに迫っていきたい。特に，生徒に学ぶ楽しさを実感させることを方策として，学ぼうとする力を育成する手立てを授業実践を通して明らかにしていきたいと考えた。

## 2 研究計画

### 1 研究1年次（平成14年度）1／3

- (1) 「社会科を学ぶ楽しさ」の分析
- (2) 授業改善の手立ての検討，それらを用いた授業実践およびその評価
- (3) 研究評価の方法についての検討

### 2 研究2年次（平成15年度）2／3

- (1) 授業実践および評価の継続
- (2) 授業実践の反省，他教科の研究を反映させた，「社会科を学ぶ楽しさ」の修正・改善

### 3 研究3年次（平成16年度）3／3

- (1) 2年次の継続研究（授業実践およびその評価の継続）
- (2) 研究のまとめ

### 3 研究内容

#### 1 生徒の意識調査の実施

##### (1) 調査方法

本校社会科で実践してきた授業改善が有効に機能し、「社会科を学ぶ楽しさ」が実感されてきていれば、社会科の学習が好きな生徒が増えているはずである。本研究を始めた平成13年度の新入生に対して、社会科学習の「好き」「嫌い」とその理由を問うアンケートを実施した。この学年が卒業する時点で、意識がどのように変化しているかを知るために、同じ質問項目のアンケートを実施した。実施時期は平成13年4月と平成15年3月である。

宇都宮大学教育学部附属中学校社会科では、平成16年度の公開研究発表会で活用する資料を作成しています。皆さんにもご協力いただきたく思います。お忙しい中だとは思いますが、次のアンケートにお答え下さい。

宇都宮大学教育学部附属中学校社会科主任

3年 組 番氏名

1 中学校3年間の社会科の授業を終えて、現在、社会科の学習は好きですか。次のア～オのいずれかに○をつけてください。

ア とても好き    イ まあ好き    ウ ふつう    エ どちらかという嫌い  
オ 嫌いといえる

2 1で、ア～オのいずれかに○をつけた理由をお答え下さい。

-----  
-----

平成16年3月実施の質問紙

##### (2) 調査結果

社会科の学習は好きですか

	入学時	卒業時	回答の変化	
とても好き	23	28	入学時より好きになった生徒	45
まあ好き	52	61	入学時より嫌いになった生徒	33
ふつう	35	34	変わらない生徒	56
どちらかという嫌い	23	6		
嫌いといえる	1	5		

# 好き・ふつう・嫌いに書かれた理由

理由	全体		好きな理由		嫌いな理由	
	入学時	卒業時	入学時	卒業時	入学時	卒業時
授業や教師に関すること	2	31	1	26	0	2
学習内容への興味・関心の有無	5	15	4	9	1	2
調べる, まとめる学習活動について	24	12	19	6	1	0
討論, 発表などの学習活動について	4	3	3	3	0	0
考える学習活動について	2	15	1	8	1	0
知識の増加, 理解の促進について	41	23	41	23	0	0
覚える, 暗記といった学習活動について	53	22	10	2	24	9
得意・不得意や成績に関すること	5	19	5	3	0	1
将来や今後の生活での必要性	5	19	4	19	0	0
現在の社会事象の理解について	2	18	1	12	0	0
分野, 内容によって好き・嫌いが異なる	33	27	25	17	2	2
その他	6	2	3	1	0	0

## ◆理由の分け方の回答例◆

- 授業や教師に関すること：「授業（具体的な学習活動が記載されていないもの）が楽しい」「先生の話がおもしろかった」
- 学習内容への興味・関心の有無：「そもそも社会科には興味がない」「だんだん興味がわいてきて、今では好きといえる」
- 調べる, まとめる学習活動について：「調べてレポートなどにまとめるので好きだ」
- 討論, 発表などの学習活動について：「話し合っているいろいろな意見が聞けて楽しい」
- 考える学習活動について：「因果関係などを考えることがおもしろい」「考えれば分かるので楽しい」
- 知識の増加, 理解の促進について：「社会科はいろいろなことが分かるので楽しい」「自分の世界観が広がっていくのでおもしろい」「よく分かるので好きだ」
- 覚える, 暗記するといった学習活動について：「暗記すればできるので好きだ」「覚えるのが苦手」
- 得意・不得意や成績に関すること：「もともと得意な教科なので（好きだ）」「（授業は楽しいが）成績が悪いのであまり好きではない」
- 将来や今後の生活での必要性：「社会科の学習は将来役に立つ」「社会科の授業で学んだことが、自分の進路選択に影響している」
- 現在の社会事象の理解について：「前はそうではなかったけど、ニュースを見ていて分かることが増えた」「今の世の中をみる上で必要な教科だ」
- 分野, 内容によって好き・嫌いが異なる：「歴史は好きだが、地理は苦手（ふつう）」「政治についてはよく分かったが経済が苦手なので（やや好き）」
- その他：「好きでもあり嫌いでもある」「特に理由はない」、未記入

#### ◆分類の仕方◆

生徒が「理由」に記した内容を分析し、項目を設け分類した。分類は次のように行った。

例1 社会科の学習は好きですか … まあ好き

理由：社会科の授業は楽しかった。テストは苦手だったけれど。社会科は人生で役に立つ教科ですね

この場合、「理由」の欄には「授業や教師に関すること」「得意不得意や成績に関すること」「将来や今後の生活での必要性」の3つでカウントした。「好きな理由」の欄は、「授業や教師に関すること」「将来や今後の生活での必要性」の2つでカウントした。

例2 社会科の学習は好きですか … ふつう

理由：地理、歴史は好きだったが、公民はどうも…。調べたり発表したりするのは好きなのですが、公民は考えれば考えるほど分からなくなる。」

この場合、「理由」の欄には「分野、内容によって好き・嫌いが異なる」「調べる、まとめる学習活動について」「討論、発表などの学習活動について」「考える学習活動について」の4つでカウントした。「好きな理由」「嫌いな理由」には「ふつう」と答えているのでカウントしていない。

#### (3) 考察

以上の結果から、次のことが読みとれる。

まず、社会科の学習が「とても好き」「まあ好き」が増加し、「まあ嫌い」「嫌いといえる」が減少している。従って、中学校3年間の間に、社会科が好きになった生徒が多かったことがわかる。

次に「好き、ふつう、嫌い」と答えた理由をみる。入学時は、「覚える、暗記」する教科、知識の増加、理解の促進といった「いろいろなことがわかり見聞が広まる」教科、「調べたり、まとめたりする」教科というイメージが強いことがわかる。「好きな理由、嫌いな理由」も含めて、多くの生徒の答えた理由を総合すると、入学当初、生徒は社会科の学習に対して「調べてまとめる」といろいろなことがわかるので好きだが、覚えることがいやだ」というイメージを抱いていることがわかる。

卒業時に増加している「理由」は、「授業や教師に関すること」、「学習内容への興味・関心の有無」、「考える学習活動について」、「得意・不得意や成績に関すること」、「将来や今後の生活での必要性」、「現在の社会的事象の理解」である。減少している「理由」は、「調べる、まとめる学習活動について」、「知識の増加、理解の促進について」、「覚える、暗記といった学習活動」についてである。

このような結果になった理由を、次のように考えている。

「授業や教師に関すること」が多く挙げられていた理由については、やはり我々自身が「学ぶ楽しさ」を実感できるように授業を改善してきたことへの評価であると考ええる。我々の取り組みが端的に示されていると考える。一方、質問紙に「3年間の社会科の授業を終えて」というリード文がついてしまっていること、調査時期が3月初旬の卒業間近であり、教師への感謝の気持ちを含めた記述が多く見られたことも一因として挙げ

られる。

「考える学習活動」については、3年間の授業で、我々教師が学習課題を考えたり、発問をしたりする際、生徒が「なぜだろう」「どうしてだろう」と考えられるような教材開発を行ってきたことが挙げられる。特に昨年度取り組んだ「ゆさぶり」の結果であるとも考えられる。また、学習を通して考える場面を多く設定してきたこと、「今後どのようにしたらよいのだろうか」「(学習で採り上げられた事象以外に)こちらの場合はどうなのだろう」といった学習後に新たな疑問が生じるような学習活動を行ってきた結果でもあろう。相対的にいろいろなことが分かって楽しいといった「知識の増加・理解の促進について」、「調べる、まとめる学習活動」が減少する結果となっており、本校社会科がこの3年間に行ってきた授業が反映されていると考える。

「将来や今後の生活での必要性」、「現在の社会事象の理解について」に分類される回答は、「理由」の中でも「好き」な理由として挙げられている。その原因として、本校社会科の授業が、時事問題やニュースなどを採り上げながら行われてきたことが挙げられる。また、この成果が、「学習内容への興味・関心の有無」の好きな理由に反映されているともいえよう。

「覚える・暗記といった学習活動について」が減少している理由として、1年生の最初に調査した際、今後の社会科学習への期待もさることながら、入学検査を受けて入学してくる生徒の、入学時点での社会科のイメージが大きく影響していると推測している。一方で我々自身が、生徒の社会科に対するイメージを変えてきた成果ともいえよう。特に、評価を知識・理解面に偏らず4つの観点からバランスよく評価できていたことの一つのあらわれとも考えている。

全般的にみると、3年間、「学ぶ楽しさ」を実感させる授業改善に取り組んできた結果として、おおむね満足のいくものだった。そして、「理由」に挙げられたことがら生徒にとっての社会科を学ぶ意義でもあるとすれば、学習観が大きく変化したといえる。入学当初「社会科の学習は調べてまとめるもので、暗記もしなければならない。学習するといろいろな知識が増えたり、分かる。」というものから「社会科の学習は(知識・理解が増えることに加えて)考える学習でもあり、今の世の中を理解したり、将来の生活に役に立つ。」というものになってきた。「学校知としての社会科学習」から「生活知としての社会科学習」になってきたといえよう。

### 3 「学ぶ楽しさ」を位置付けた授業における生徒の意識

次に「学ぶ楽しさ」を位置付けた授業で、生徒の意識がどのようなものであったかを紹介したい。

#### (1) 地域の規模に応じた調査「身近な地域」の実践から

##### ア 本小単元における学ぶ楽しさを実感させる工夫

本小単元の学習で意図した「ゆさぶり」とは、生徒が日常何気なく見ている身近な地域の事象を対象として、その位置(分布)には実は様々な意味があり、その位置に存在する理由が多角的に考えられることに気付かせ、知的好奇心や探究心を駆り立てることである。



e

福田屋が移店した理由の中にも、これだけたくさん理由があり、その中には、自分達でも想像できなかった理由(西北原が、電気が来やわいこと、品物を置く大きなスペースが必要とゆき郊外が適していること)があることまで、すぐにおもしろいと思った。これからこのように学習が、おもしろいことを生かした「視点」を使っていきたいと思った。

f

いつモイテ、ている所の見方を、変えろといろいろなおもしろい、面が見えてきておもしろいと思えた。  
FKDの意味は F K D だと思っていたので、正しいことがわかってために、な。た

g

“中心地が便利”という訳ではなくなってきたと考える人、企業が「増えたり減ったり」することが分かった。

h

FKDが移店した理由で、中部圏市の特徴がたんとみえていた。ただ単に移転したのではなく、お宝をもうけるために、駐車場のことや土地、住宅地のことを考えて移転したことが分かった。  
その市の特徴を知り、ていねいは、たんとみえてくるて見えた。  
今日は、中部圏市をたけたことだけ、その中によって特色が違ってくることも分かったが、他の市も調べてみたい。

i

身近な地域を学習して、福田屋の移転についておもしろかった。なぜ移転したのかなどの仮説を自分で作ったりしたのが楽しかった。あと、今は、市の中心部の人口は減っている、と思っていたので、まさか減少しているとは、とてもびっくりしました。これから、どんどん減少するのかもしれない。疑問もあきました。

j

なんでも中心部の方が便利だと思っていたけど、実際は土地の値段が高くてつくやなかり、車に乗る人が来づらくなり色々な問題があることが分かった。でもほとんどもが郊外に集まったら結局同じことにはならないのかな。

a～dの記述からは、地域の地理的事象の新たな発見や、それに関する驚きを実感している様子が読み取れる。特に、福田屋百貨店の副社長本人から企業戦略としての移転の経緯を聞き取り調査したVTRでは、身近でありながら気付かずにいた地理的条件が豊富に紹介され、ほとんどの生徒が高い関心を示した。本実践で意図した「ゆさぶり」は、本物の情報を本人が語るという形をとることで、一層有効に働いたものとする。

e～gの記述からは、社会的事象に関する見方・考え方が多様化した様子が読み取れ、さらにそれを生徒が自覚できたことがうかがわれる。また、獲得した多様な視点を他の学習に生かそうとする生徒もおり、本単元の学習活動の構成が、学ぶ価値の実感や学習意欲の高まりに着実に結びついているという手ごたえを感じることができた。

h～jの記述からは、調査による現状分析の結果をふまえた未来予測をしたり、今後の地域の姿に疑問を持ったりする生徒も出てきたことがわかる。本単元の学習内容・方法・指導の工夫が、生徒の関心を高め、疑問を解決したり、他地域に移転して調べたりするような発展的な学習をしたいという意欲を高めたものとする。

以上、一単元の事例を示したが、上記の生徒の記述を総合してみると、学習が楽しかったこと(学ぶ楽しさの実感)、学習がためになったこと(学ぶ価値の実感)を受けて、学ぶ意欲が高まったことが明確にとらえられる。このような授業改善の工夫を地道に積み重ねて来た結果が、前述の研究の評価に結びついていると考える。

## (2) 公民的分野「多数決で大丈夫? (民主政治とは2)」の実践から

### ア 本小単元における学ぶ楽しさを実感させる工夫

学ぶ楽しさを実感させるため、授業の冒頭でゆさぶりを活用する。本時のゆさぶりは、「多数決が民主的な決定をもたらす」と思いこんでいる生徒に対して、次のような事例を見せることである。

- ・生徒自身の模擬投票（保護者、先生との会議に出席する学級代表を3名選ぶため、1～3位までの順位をつけて投票させた）の結果が、単記投票による単純多数決（投票1位の生徒のみを集計し、得票数の多い上位3名を代表とする方法）と順位評定法（1位に3ポイント、2位に2ポイント、3位に1ポイントを与え、合計ポイントが上位3名を代表とする方法）では選ばれる人が異なること。
- ・四つの宇都宮市の課題（中心市街地の再生、産業の振興、保健・医療・福祉の充実、青少年の健全育成環境づくり）のうち、最優先課題を決定するシミュレーションにおいて、単純多数決、決選投票付きの多数決、順位評定法のそれぞれの方法で結果が異なること。

以上二つの事例から、「多数決で決めれば間違いない」と確信している生徒に対して、「多数決でも決め方によっては異なる決定がもたらされることがある」ことを実感させ、既得の知識にゆさぶりをかける。

この学習を通して、「決め方を決めることも重要である」ことを理解させるとともに、「当たり前と思っていたことを再度見直す必要がありそうだ」というように、社会的な見方・考え方の変化を促す。さらに、批判的思考を促進する契機としたいと考えた。

授業では、冒頭のゆさぶりののち、自分たちの代表者である衆議院議員を決めている選挙制度について学習する。資料として前回の衆議院選挙の結果を利用した。

#### ○授業で使用した資料

※いずれも2000年衆議院選挙時

- ・衆議院小選挙区における得票数と議席数の関係
- ・衆議院比例代表区における得票数と議席数の関係
- ・栃木2区、東京1区の各候補者の得票数
- ・衆議院北関東ブロック選挙制度別政党別当選者数

それぞれの選挙制度の長所・短所を列挙するだけでなく、小選挙区と比例代表制について長所・短所を資料から読みとった上で、どのような選挙制度が国会議員の選出方法として望ましいのかを考えさせる。こうした学習活動を通して、「衆議院議員は小選挙区と比例代表制によって選ばれている」という知識を覚える学習にとどまらず、現在の選挙制度の特色を知った上で、よりよい選挙制度に関心を持ち続けられる生徒を育成したい。

#### イ 授業の評価

第1に授業の最後に記入したワークシートの記述（今日の学習でわかったこと、新たに生じた疑問）から、第2に授業後の学校生活の様子から授業の評価を試みた。

#### (7) 授業終了時の生徒の意見

- a 多数決もやり方によって結果が変わることに驚いた。
- b 学級委員とかも決め方によって違う人が選ばれていたということ？
- c 決め方が大切であることが分かった。何か決めるときには、決め方から決めた方がよいと思った。



d 今まで多数決で決めればよいと思ってたけど、多数決といってもいろいろな方法があることを知った。

e 国会議員の選挙結果が選挙の方法で大きく変わるのはチョットびっくり!!・・・ということは、選挙の方法を決められる人、つまり〇〇党がいつも有利っていうことなのでは!?何かずるい感じがする。

f 小選挙区で半分以上が死票になっているのはまずいと思う。

g 「政党別得票数と議席数」で、得票数が40%の〇〇党が、議席数は50%以上を占めているのはどうなのかなあと思う。

h 今の選挙制度だと〇〇党にずいぶん有利な結果になる。それなのに「民意」とかいつているのはおかしい。

i 小選挙区制と比例代表制を比較して、私はやっぱり死票の多さが気になります。国民の意見を正確に反映するということから比例代表制の方がよいと思いました。

典型的な記述を上を示した。ゆさぶりに関わる記述をした生徒（a～d）と、衆議院議員選挙に関わる記述をした生徒（e～i）に分かれた。

a～dに類した記述が半数弱あったことから、冒頭のゆさぶりで「決め方によって多数決の結果が変わる」ことを、意外性をともなって認識させることができた、といえる。このため、その後に位置づけた実際の選挙制度の学習でも「選挙制度によって選ばれる人が変わる。もしかしたら国の方針も変わる」という認識をもち、選挙制度が自分たちにとって重要なことであると考えて学習に臨ませることでe～iのような記述が生まれたと考える。また、数人の生徒はe～iのように、現在の選挙制度の短所に鋭く迫り、自分なりの「理想の選挙制度」を考える生徒もいた。ただし、小選挙区制の短所である死票の多さに注目する生徒ばかりで、比例代表制の短所である小党分立について指摘した生徒はいなかった。さらに時間をかけた検討が必要だったと考える。

以上のことから、本時のゆさぶりは、「多数決は決め方によって結論が変わる」という新しいことを知る機会となり、選挙制度を学ぶ意義を見いださせ、学ぶ意欲を高めた点で効果的であり、「社会科を学ぶ楽しさ」を実感させる手立てとして効果的だったといえる。

#### (イ) 学校生活の様子から

生徒は、学級活動の時間等にもものごとを決定するとき、「すぐ多数決をとるんじゃないくて、まず話し合いで解決することを考えよう」といい、時間をかけて話し合いに取り組み、どうしても多数決を実施するときには「まず決め方を決めておこう」というようになった。以前は何か決めるときにはすぐに多数決を採用し、決め方について留意することなどなかったのだが、この実践以降、ものごとを決めるときの態度は大きく変わった。

これは「ゆさぶり」というよりむしろ、「ゆさぶりに利用した事例」が、日常生活に影響を与えるほど生徒の認識を大きく変容させたといえる。この教材が大変影響の大きいものであることが分かった。

## 6 研究を振り返って

3年間の研究を振り返って、我々は次のように考えている。

この3年間の研究の成果は、我々自身の成長にあったという点である。研究の対象はあくまでも生徒の「確かな学力」の「学ぼうとする力」ではあるが、その育成のために我々自身はこれまで以上に教材研究を行った。特に、「社会科を学ぶ楽しさ」を調べ学習、グループ学習、ロールプレイング・ゲームなどの方法面、社会認識のかかる学ぶ「楽しさ」を内容面ととらえたとき、内容面で「学ぶ楽しさ」を実感させるための教材開発は、思った以上に楽しくもあり、苦労も多かった。今この研究に取り組む以前の自分を振り返ってみると、かつての実践の中にはともすると方法面での学ぶ楽しさに偏っていたように思える実践も多くあったと感じている。方法面による「学ぶ楽しさ」を否定するものではない。生徒から「社会科を学ぶ楽しさ」を考えさせると活動面も多く含まれると考えられる。しかしながら我々教師としては、内容からの「学ぶ楽しさ」を実感できるように教材開発をすることが重要であると改めて気付かされた。社会科はもとより内容教科だからである。そして、内容面での「学ぶ楽しさ」を実感することが、学習の後でも生徒に残り、その後の生活において生きて働く力になると考えるからである。

今後、この姿勢を大切にしながら、教材研究に取り組んでいきたい。

### 【参考文献】

- ・桜井茂男 『学習意欲の心理学』 誠信書房 2001年
- ・岩田一彦 『社会科固有の授業理論30の提言』 明治図書 2001年
- ・小原友行 「社会認識形成の『論理』と『心理』－社会科授業構成の原理を求めて－」  
社会系教科教育研究会編『社会系教科教育の理論と実践』 清水書院 1995年